

機関番号：27104

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21792189

研究課題名 (和文) 看護実践能力と“Reflection”の質的变化の関係性に関する研究

研究課題名 (英文) A Study on the Relationship between Nursing Practice Ability
and Qualitative Change of “Reflection”

研究代表者

於久 比呂美 (OKU HIROMI)

福岡県立大学・看護学部・助手

研究者番号：10512022

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、看護の専門性を高める要素の一つである Reflection に着目し、新人から達人看護師までの Reflection の実態を明らかにすることを目的に取り組んだ。質問項目は、Reflection との関係性が深い「自己教育力測定尺度」を採用した。結果は、看護実践の経験を積み重ねることによって自己教育力が高まることに繋がりにくい臨床現場の現状が明らかとなった。今後、看護師の自己教育力を高めるためには「本質を見抜く深い振り返り」や「内発的動機づけが伴う学習意欲」が重要であり、Reflection との関係性を示唆する結果が得られたので、さらに質的な分析を加えて検討していく。

研究成果の概要 (英文)：

With a focus on “reflection,” which is one of the factors that enhances nursing expertise, the present study aimed to clarify the current practice of reflection by nurses with a wide range of backgrounds, from new to highly-experienced. Questionnaire items were based on the “self-directed learning ability scale”, which is closely related to reflection. The results revealed that the current clinical setting did not allow the accumulated nursing experience to lead to the enhancement of the self-directed learning ability. The results indicated the importance of “careful self-reflection for understanding the essence of the matter” and “enthusiasm for learning stemming from intrinsic motivation” in enhancing the self-directed learning ability of nurses. It was also suggested that there is a connection between reflection and self-directed learning ability. Further investigation including qualitative analysis will be conducted in the future.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護実践能力, Reflection, 自己教育力

1. 研究開始当初の背景

2002年、大学基準協会「看護学教育研究委員会報告」では、看護の専門性を高めていくことの重要性が述べられている。先行研究においても、看護師が専門性を高めていくために必要な要素は、批判的思考 (Mary, A. M., & Dorothy, E. B., 2002), 問題解決能力 (大学基準協会, 2002; 辰野, 1970), 創造性 (大学基準協会, 2002), Reflection (奥野, 2010; 池西ほか, 2008; 本田, 2003a, 2003b) 等、さまざま指摘されている。

その中でも“Reflection”は、看護師が専門職としての自己成長を促す学びの原点といえる。なぜならば、特に看護師は、振り返ることから、自分自身を見つめ直し、自己の課題を見だし取り組むことによって、専門職としての自己成長は促されていくことが考えられた。

しかしながら、看護師の自己成長は、Reflection さえすれば促されるというわけではない。そこに、自らの力で自分自身を育てたいと志向する“自己教育力”の要素が含まれることによって促されていくと考えた。したがって、Reflection は、自己教育力との関係性が深いことが推察された。

そこで、看護師における Reflection の先行研究をみると、Reflection という概念が個人的要素と関わるがゆえに、質的な分析が多いという傾向がみられた (奥野, 2010; 池西ほか, 2008; 本田, 2003a, 2003b)。一方、量的な分析にて成果を示したものは、研究者の検索する範囲ではみつけることができなかった。

看護師における Reflection の傾向を把握するためには、まずは看護師全体の Reflection の実態を量的に分析する必要があると考えた。そのため本研究では、看護師の Reflection を量的に分析するために、Reflection との関係性が深く、すでに定義や構成要素、測定尺度が明らかにされている“自己教育力”に注目することにした。

ここでいう自己教育力とは、梶田 (1985) によって「自分自身で学び、成長、発達してゆける力」と定義され、4つの主要な側面から構成されている。また、これら4つの側面

である「Ⅰ. 成長・発展への志向」「Ⅱ. 自己の対象化と統制」「Ⅲ. 学習の技能と基盤」「Ⅳ. 自信・プライド・安定性」は、相互関係性があると説明されている (梶田, 1985)。

この自己教育力は、看護実践経験の少ない看護師にすれば、看護に関する知識や技術が未熟であるがゆえに、熟練した看護師の自己教育力に比べて質的な違いが生じることが推察される。なぜならば、看護の専門性を高めていく過程は、初心者・新人・一人前・中堅・達人といった5つの段階があり (Benner, P., 2006), 各段階における看護実践能力の違いは、その看護実践能力を促進する自己教育力の質にも違いが生じるのではないかと考えられた。

前述した内容より研究者は、看護実践の経験年数を積み重ねてきた看護師は、自己教育力≒Reflection が高いのではないかという仮説を立て、以下の研究目的にて研究を行った。

2. 研究の目的

臨床看護師の看護実践能力を向上させるために看護実践を量的・質的に分析し、看護実践能力の異なる新人看護師から達人看護師までの各段階における Reflection (≒自己教育力) の実態について検討を行った。

3. 研究の方法

(1) 調査方法

A県内において研究同意の得られた2箇所の総合病院 (300床以上) に勤務する看護師650名を対象者とし、平成21年8月～9月まで質問紙調査を行った。

質問紙調査の項目は“Reflection”の実態を明らかにするために、必要な内容を吟味し、西村ほか (1995b) の「自己教育力測定尺度」を採用した。

調査内容は、経験年数を含む基本属性8項目と自己教育力測定尺度 (西村ほか, 1995b) 40項目で構成し、測定尺度は開発者の承諾を得て使用した。

倫理的配慮としては、研究趣旨、匿名性、自由意思の保障などを明記した文書とともに調査票を配布した。研究の同意は、調査票の返信をもって確認した。

(2) データの分析方法

調査票は365名分を回収し(回収率56.1%)、不完全回答項目を欠損値とした365名を分析対象とした(有効回答率100%)。

分析は経験年数を先行文献(Benner, P., 2006; 松尾, 2006; 梶山, 1997, 1993)を参考にして5群に分類(1年未満, 1年以上4年未満, 4年以上7年未満, 7年以上10年未満, 10年以上)し, SPSS17.0J for Windowsを用いて, 分散分析と重回帰分析を行った。

自己教育力の下位尺度得点は、「はい」に2点, 「いいえ」に1点を配置し, 自己教育力の4つの側面ごとに分けて算出した。

下位尺度得点の高低は, 下位尺度得点平均値15点より高値の場合は高い群, 低値の場合は低い群と捉えた。

4. 研究成果

研究仮説を「臨床実践の経験を積み重ねるほど自己教育力は高まる」と立て, 量的手法を用いて実施したが, 結果は, 実践経験を拠所とすることなく, どの経験年数の段階にある看護師も, 自己教育力の4つの側面のうち「Ⅰ. 成長・発展への志向」(16.79±1.89)と「Ⅱ. 自己の対象化と統制」(16.42±1.57)が高く, 「Ⅲ. 学習の技能と基盤」(14.92±2.21)と「Ⅳ. 自信・プライド・安定性」(14.41±2.25)が低いという興味深い結果が得られた。

また, 自己教育力の4つの側面の関係性については, Ⅰ側面とⅡ側面($P=.009$), Ⅰ側面とⅢ側面($P<.0005$), Ⅱ側面とⅢ側面($P<.0005$), Ⅳ側面とⅠ側面($P=.006$), Ⅳ側面とⅢ側面($P<.0005$)の間に関係性がみられた。しかしながら, 経験年数の違いによる特徴的な相違は見られず, 日々, 臨床実践の経験を積み重ねることによって自己教育力が高まることに繋がりにくい臨床現場の現状が明らかとなった。

経験年数による自己教育力の違いがみられなかった第1の要因として, 本来, 看護実践とは質を伴うことが重要であり(Benner, P., 2006), 患者に深く関わった個別性のある看護を行うことにより実現することができる。小山(2004)は, これまで質の代わりに作業量や財務的な目標値に重点を置きがちで, 各々の患者にとって可能な限り最高のケアのアウトカムを提供することが医療の中核の目的であるという認識に欠けていることを指摘している。

このように現状の看護実践は, 小山(2004)が指摘するように看護のルーチン業務を与えられた時間内に効率良くこなすことを優先する傾向にあり, 質を伴う看護が実践しづらい職場環境が多いと推察する。しかし, 看護師本来の職務とされる看護の専門性や独自性を発揮するには, 従来の看護のルーチン業務に比重を置かざるを得ない看護から脱却し, 看護の本質を追求できるような看護実践の積み重ねが可能となる職場環境を形成することが重要であると考えられる。

経験年数による自己教育力の違いがみられなかった第2の要因として, 臨床の間では看護を評価する際, 自発的または他者からの指摘によって, 自らの看護実践の振り返りを行うことが多い。しかしその振り返りは, 小山(2004)が指摘するような看護のルーチン業務を中心とした内容を振り返るを得ず, 看護師としての自己の在り様や看護の本質を迫ることが難しいと推察する。

また, 様々な疑問や不明なことを解決するために看護師は学習行動をとるが, その行動も外圧や必然性に駆られた看護のルーチン業務を覚えることを主要とする学習に偏っていることが多く, 看護師としての自己成長を促進させることに繋がりにくいと推察する。

これらのことより, 看護師の自己成長を促進・強化するには, 梶田(1985)が指摘している“自己の振り返り”と“内発的動機づけが伴う学習意欲”が必要であると考えられる。つまり, 看護師の自己教育力を向上させるためには, 4側面のうち「Ⅱ. 自己の対象化と統制」= “自己の振り返り”, 「Ⅲ. 学習の技能と基盤」= “内発的動機づけが伴う学習意欲”

を高めるための教育的関わりが重要であると考える。

このことにより、相互関係性が検証されている他の側面である「I. 成長・発展への志向」と「IV. 自信・プライド・安定性」も影響を受け、自己教育は高まることが期待できる。

以上のことから、自己教育力を高める教育方法として、看護本来の看護実践が日々積み重ねていけるような職場環境を基盤として、自己の振り返りや学習意欲を高める教育内容を検討することが重要であると示唆された。

今後、看護の専門性を追及し続けていくためには、看護師の自己教育力が高まるよう“本質を見抜く深い振り返り”や“内発的動機づけが伴う学習意欲”が重要であるという“Reflection”との関係性を示唆する結果が得られたので、さらに質的な分析を加えて検討していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

於久 比呂美 (OKU HIROMI)
福岡県立大学・看護学部・助手
研究者番号：10512022

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし